
after

時雨 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

after

【Nコード】

N4676Z

【作者名】

時雨 豊

【あらすじ】

窓付きは飛び降りた。

タマゴを、希望を、全て捨て去ったかのように見えた。しかし、彼女の夢にはまだエフェクトがあった。

これは、窓付きの最後の物語。

彼女が最後まで捨てられなかった一つの希望の物語。

窓の外

真っ暗で、何も見えない闇。

ただ、ただ、闇。

今までの世界と違う、『そこ』に、

少女と、赤い、クラゲのような生き物だけがいた。少女は、そのクラゲの横に座っている。

「……全てを捨てたか、窓付き」

言葉を発したのは、少女ではなく、その隣にいるクラゲだった。少女は、何も喋らない。

「希望タメユを捨てた先に、何かあったか」

「飛び降りた先に、何かあったか」

「現実を見た先に、何かあったか？」

少女は、何も言わず、代わりに首を横に振った。

「そのまま夢の中にいればよかったものを。何があったのだ？ 何が見えたのだ？」

「……………ダメ」

「……………？」

少女は、すつと立ち上がった。

「……………どこへ行くこともできないぞ。ここは夢の中ではないのだから」

「いか、なきや」

「……………ああ、そうか」

クラゲに、表情は無い。

ただ、その声には、寂しさや、安堵、いろいろなものがまじりあっていた。

「やはり希望を捨て切れなかったか、窓付き」

窓付きは、その闇の空間から消え去った。

「…付、窓」

「どうしたの、いきなり？」

「……あ、ポニ子。いや、なんでもないよ」

微かにだけど、窓付きが僕を呼んだ気がした。

「まあ、心配なのは分かるけどさ。窓ちゃん、今頃どうなってるんだろう……意識不明って話だけど」

「長いこと学校には来ていなかったけれど……まさか自殺しようとするなんて」

ポニ子とモノ江が、窓付きのいるだろう病院を見ながら言った。その横には、僕らの団地も見える。

僕たちは、同じ団地に子供の時からずっと一緒に住んでいる。だから、帰る道も一緒だ。

ちなみに、ポニ子というのももちろんあだ名だ。ポニーテールだから、ポニ子。モノ江も、真っ黒な髪と、真っ白い肌をしてるからモノ江。

窓付きのほうも、初めて見た私服の模様が、窓に似てたから、っていうだけだし。

……窓付き。

そうだよ、窓付きだ。

以前は、彼女こそがこのグループの中心だったんだ。

だけど、もういつからかは分からないけど、学校に来なくなって…。

そして、さっきの話のとおり、自殺未遂までしてしまっただけらしい。窓付きが住む、団地のベランダから。

そこまで高くなかったのと、当たり所が良かったので、一命は取り留めたけど、今も意識不明の重体、とか。

なにが原因なのかは分からない。いじめとか、そういうのはなかったはずなのに。

そりゃ、前から明るい性格じゃなかったけどさ……。

どうして死のうとなんてしたんだよ、窓付き。

「ねえ、タマ」

「ん？」

タマってのは、僕のあだ名だ。

本名は希望と書いて、のぞみ、っていうんだ。よく、女の子みたい

な名前だっからかわれた。
けれど窓付きは、

『希望と書いて、のぞみ、って言うんだ。よろしくね』

『……タマゴ？』

『はいつ？』

なぜかじーつと僕の方を見て、そう言ってきたんだ。

それ以来、あだ名が「タマ」で定着しちゃったんだっけな。

あんまり喋らないんだけど……だからたまに喋るのが、すごく可愛
かったんだよなー。

「ちょっと、タマ？」

「え、ああ、ごめん。それで何？」

「いや、夢の中なら、窓ちゃんがどうしてるか分かるかなって」

「……でも、窓付きが学校来なくなってから、見なくなっただろ？」

夢。

それが、僕と窓付き、モノ江、ポニ子を繋ぐ絆だった。

どういう原理かは分からないけど、僕等は、決まって同じ夢を
見ていた。

夢の世界は、みんな同じ。そして、窓付きと僕らで、そこを探検するんだ。

……その世界はいろいろある。三年くらい、ずっと同じ夢の世界で探検をしていたけど、全く飽きることが無かった。

でも、今は、窓付きが意識不明だからか、同じ夢は見ることができない。

そう、あの夢は、窓付きの夢だから。

窓付きだけが、あの世界で自由に動き回れる。彼女が来ない限り、僕等もずっと、自分のいる部屋から抜け出せない。そして、彼女が「ついてきて」「とか」「出ていいよ」とか言って、やっと僕等も動き出せる。

あの夢は、窓付きの世界なんだ。

「そういえば、窓付きは『ゆめにつき』を書いている、って言うってたわよね」

「ああ、そうだな」

「それを見れば、なんであんなことしたのか、とか、分かるんじゃない？」

……確かに、その通りだ。なんで今まで気付かなかっただろう。ゆめにつき……というからには、やっぱり夢の内容を書いてあるんだろう。僕等は夢の中で、窓付きの世界を見ることができるけど、窓付き自身を見ることはできない。

夢が窓付きの世界を表すなら、ゆめにつきは窓付き自身を表す、ってどこか。

「でも、さすがにそんな興味本位では入れないだろ。自殺未遂から一晩明けただけなんだぞ？」

「……タマ、窓ちゃんの隣の部屋だよね」

「なっ、こっそり忍びこめてのか!？」

「いいじゃん、ベランダのところが窓ちゃんの部屋なんだから! すっつと行つてすっつと帰ってくればいいだけだよ!」

「お前なあ……」

ポニ子は可愛い顔して意外と非常識でとんでもないようなことを言う。だいたい、落ちたらどうするんだ。窓付きと同じ道をたどることになるじゃないか。

「……でも、俺も窓付きが気になる。できることなら、力になってやりたい。」

「………はあ。いいよ、やってみる」

「ホント!? ありがとう!」

落ちたらポニ子のことを恨むぞ。カエルを服の中に入れてやるんだからな。

幸い、この団地は部屋同士が離れずに、壁で仕切られているだけだから、段差を用意すれば何とか隣の部屋にも入ることができる。両親も、今は窓付きにつきっきりだっていうんだから、家は留守だ。入れるんだが……。

「良く考えたら、窓なんて開いてないよな……開いてないならしようがないよな」
そんな半ば願望のようなものを呟きながら、俺は初めて不法侵入した。

窓は開いていた。

「……窓付きが飛び降りた後、ずっとそのままにしたのか？」
そう思いながら、『玄関からは』何度か来たことのある、窓付きの部屋を見渡す。

日記があるとしたら、机の中か。でも、日記だから、かぎ付きの引き出しに入ってもおかしくないな。

……机の上に、置いてある。

多分、これで間違いない。『丁寧に』ゆめにつき『と可愛い文』字で書いてある。

本当、窓付きが飛び降りてからそのままになってるのかもな。だとしたら、窓付きが飛び降りる直前も、このゆめにつきを書いていたんだろうか。

あんまり、人の日記を読むとか気乗りしないけど……まあ、しょうがないか。

まず、最後のページだけ見てみよう。

『死にたくない』

「…………え？」

それだけ、書いてあった。

これが、自殺未遂の直前に書いた文？ そんなわけないと思うけど……。
だけど窓付きは病院で、意識を失っている。そんな状態で家の日記を書けるわけがない。

直前でなくとも、これが飛び降りる前の最後の文ってことになる。

他のページも見てみるか……？

『だれもわるくない』

また、これだけだった。

あいつ、日記の中でも無口なのか？
最初のページをしてみる。

『私は、やっぱり嫌な子だ。

夢の中、あれは私の中。私の世界。

いやだ。いやだ。いやだ。

こんな世界、なくていい。壊れてしまえばいい。
私を映さないで。あれは私だ。
誰か私を壊して。私なんか嫌いだ。』

「……窓付き」

普段何も喋らない奴だけど、こんなこと思ってたのか。
僕たち、夢の中に入っては馬鹿みたいにはしゃいでたけど……悪か
ったな。

そうだ、何か手掛かりを探さないと……。
ペラペラと流しながら日記を見てみると、気になる文があった。

『みんな大好き。』

ポニ子も、タマも、モノ江も、みんな大好き。

私の友達でいてくれてありがとう』

プラスなことが書かれてるのは、このページだけだ。

この日は何かしたか？ 何力月も前だから、全然覚えてない……。

っと、そうだ、早くこれをみんなに見せないと。

「…………え？　これが、窓ちゃんの日記？」

僕の家には、ポニ子、モノ江を呼んで、窓付きの日記を見せた。

「ああ、そうみたいだ」

驚くのも無理はない。

書いてあることは、後ろ向きなことばかりだったからだ。

「なあ。なんであの夢の世界、あんなおどろおどろしいところだったのか、ってさ、考えたこと、ある？」

「…………ない、ね」

「あれって、窓付きの夢だよな？　すごく今更なんだけどさ…………なんで、窓付きはあんな夢見てたんだろ？」

「……………何が言いたいの、タマ？」

「あの夢を窓付きが見ていた原因って、いったいなんなんだ？」

思えば、不思議だった。

いじめもなかった。両親もすごくいい人だった。もちろん窓付きだって、無口だけどすごくいいヤツだ。

何が悪くて、あんな暗い夢を見ていたんだ？

「と、とにかくさ。もっと見てみようよ、日記。ああだこうだ考えてるよりは、よっぽど手がかりが見つかりやすいでしょ」

確かに、ポニ子の言うとおりだ。僕たちは、もう一度日記に目を通した。

「……あら？ この日だけ、なんだかちよっと明るいわね」

「ああ、『みんな大好き』ってどこ？ そうなんだよな、この日、なんかしたっけ？」

モノ江が、僕も気になっていたページを見つけた。

「……この日って、窓付きが学校に来なくなった日よ？」

「えっ!？」

あ、確かにそうだ。この日から突然窓付きが学校に来なくなったから、みんなで心配してたんだっただ。

……でも、それならなおさら分からない。こんな明るい日記をつけた日なのに、なんで突然学校に来なくなったんだ？

「ゆめにつきに手掛かりはなし、かあ……窓ちゃん何考えてるか分かんないからなー」

「言っても仕方ないだろ？ また、窓付きが帰って来てからゆっくりと話せばいいじゃないか」

「そうね。今更根掘り葉掘りしたって、窓付きが余計傷つくだけよ。

それよりは、少しでも早く回復するように千羽鶴でも折って祈って
いましょうよ」

「あ、それ名案だね！」

その後は、みんなで頑張って100羽くらい作って、解散になった。
このペースで進めていったら残り9日か……もう少し頑張らなきゃ
な。

僕が不器用だったから、余計に時間食っちゃったわけだし。

もう夕方か……。

「眠りしようかな。」

なあ、窓付き。

お前は今、どんな夢を見てるんだ？

窓の外（後書き）

どうしても、窓付きを救ってあげたくてこの小説を書きました。ト
ラウマ緩和用の小説です。

ついでに個人的な考察も入れてます。

分かっていますとも。あの終わり方だからこそ、ゆめにつきはさら
なる評価を得た。

これは、その終わり方を無理やり否定するような小説です。

……でも、とある作家は言いました。

フィクションは、「現実では救ってあげられない物語を救ってあげ
られる」と。

なら。

なら、二次創作は。

「救ってあげられなかった物語を救ってあげられる」ものだと、私
は思うのです。

窓付きのいない夢

「うわっ!?!」

目が覚めると、どこか暗い場所にいた。

そこで僕は、手すりのついた階段の上に立っている。

なんだか懐かしい感覚だ。

「これって……窓付きの夢の中?」

久しぶりだが、これは窓付きの夢の中だ。でも……少し暗い?

なんで、今更……?

大きなチャックのようなものが目の前にある。

確か……これを開けて先に進むと、数字がたくさん書かれた部屋に行くんだっとな。

「先に、進むか……」

この夢を再び見たってことは、何か窓付きが伝えようとしてるってことかな……?

定かじゃないが、今は先に進む他ない。

大きなチャックをこじ開け、次の部屋に入ることにした。

「……………やっぱり、暗い」

久しぶりに入ったその部屋は、やっぱり前よりも暗かった。それだけじゃない、数字の数も増えている。

記憶を頼りに歩いていく。

確か、扉がたくさんある部屋があった。そこなら、何かつかめるかもしれない。

「……………ん？」

だがそこへの扉を見つける前に、またしても前とは違うものを見つけた。

あんなところに、通路があったか……………？

前とは違う通路があるなら、むしろそっちの方に手がかりがあるかもしれない。

そう思って、僕は知らない通路を通ることにした。

そう長くはない。だが、その先にはまたしても扉があった。

その先に行くしかないし、行く。

扉を開けると、ベッドとタンスがたくさんある部屋にでた。
それしか言いようがない。

……まあ、窓付きの夢は言いようがないものばかりだが。

いや。でも、こうなったら考えるしかない。

せつかく久しぶりに中に入ることができたんだ。

意味のないようなものでも、意味があるのかもしれない。

読み取るんだ、窓付きの想いを。

ベッドと、タンス……。

どちらも、充分人が入れるくらいの大きさだ。

ひきこもっていたい……ってことか？ さすがに、こじつけすぎかな。

本当にたくさんあるな……数えてみようか

「うわぁっ!!!?!」

びっ、びっくりした！ びっくりした！

大きい、鳥の顔をした人が、目の前に突っ立っていた。
と、……鳥、人間、鳥人間？

よし、鳥人間と呼ぶことにしよう。

鳥人間は、ゆっくりと僕を見つめた。

「……窓付きじゃ、ない？」

「あ、え、はい……僕は窓付きの友達です」

「窓付きを傷つける奴は、出ていけっ!!」

「は、はあっ!?!」

と、友達っていっただけじゃないか!　なんで傷つける奴になるんだ?

なんて思っている間に、鳥人間が僕を追いかけてきた!

「な、なんで追ってくるんだよ!　僕は、窓付きの友達だって!」

「……友は、窓付きを傷つけるだけ。夢の中にまで入ってくるな!」

「な、なんなんだよ一体　うわあっ!?!」

鳥人間に肩を掴まれた瞬間、どこかへワープした。

窓付きの夢の中じゃ、ワープすることは別に珍しいことではない。だけど、あの鳥人間はなんなんだ?　友は窓付きを傷つけるだけ、って……。

ともかく、ワープしてしまったものはしょうがない。探索を続けよう。

ワープしたところは、さっきの数字の世界に似ていた。

だけど……その床の真ん中に書いてある文字。

そこには、大きく、赤い字で『あ』と書かれてあった。

数字の世界なのに……あ？ どういうことなんだ？

そう思って、その『あ』という文字に近づくと

あたり一面が、『あ』という文字に塗りつぶされる。

ただ、種類の文字がいくつも書かれているだけなのに、

恐怖で、足がすくむ。

怖い、怖い、怖い。

『あ』ときれいな楷書で書かれているだけだ。それがたくさん並んでいるだけだ。

なのに、どうしてここまで恐怖を感じる？

答えは簡単だ。

この『あ』という文字、一つ一つに、狂気と、苦しみを感じるから。字体だけ見れば、コンピュータで打つてあるような文字だ。だけど、その字には『意思』を感じた。

苦しい、とか、助けて、とか、そんな思いが脳裏に直接入ってくる。

吐き気がした。

「覚める……覚めるっ、覚めるっ、覚めるっ……！」

気付けば僕は、夢が覚めるように必死に念じていた。

「　っ……！」

気付けば、僕は自分の部屋にいた。

目が覚めたんだ。

そんな当たり前のことに気付くのに、しばらく時間がかかった。

寝ていただけなのに、肩で息をしている。

時計を見ると、もう8時だった。もう夕食の時間だ。

僕は、汗をぬぐいながら階段を下りた。

「だ、大丈夫？ 死にそうな顔だけど……」

降り来て、すぐに母さんから心配された。
よっぽど今の顔が疲れてるんだろうか。

見てみると、もう夕食ができていた。いいタイミングだったんだな。

……食欲はあんまりわかないけど。

結局、夕食はほとんど食べられなかった。

重い足取りで、またベッドに倒れこむ。

また、あの夢を見ると思うと気が進まない。

けど、窓付きのため……だよな。

今度は、頑張ってみよう。

「……………」

また、僕は手すりのついた階段の上に立っていた。
夢の中に来たんだ。

……この夢の中は、いつ来ても不思議だ。現実みたいに意識がはつきりしてるから。

とりあえず、さっきの、数字の部屋まで行こう。

大きなチャック扉を開けて、数字の世界へ行く。
さっきと変わらない。全体的に暗くて、床にはいくつか数字が書か

れている。

……そして今度は、

太鼓に足が生えたような奴が、僕に近づいてきた。ぴよんぴよんと跳ねながら。

……よく見ると、太鼓部分に目がある。

「あの……」

太鼓は、僕に近づくだけ近づいて、何も言わない。口がないから、喋れないのか？

でも、僕のことをじっと見てくる。ひたすら、じーっと。

「言葉は、分かるんですか？」

訊いてみる。

すると、太鼓はぴよんぴよんと跳ね始めた。

……うーん。分かるってことでいいのか？

「えーっと、扉がたくさんあるところに行ける扉って、どこですか？」

再び訊いてみると、今度は僕に背を向けて、ぴょんぴょんと跳ね出しました。

ついてこいってことか？

そう思うしかないので、その太鼓のあとをついていった。

そして、しばらくした後、太鼓は扉の前で止まった。

……あつ、この扉だ。

「どうもありがとうございます。おかげで助かりました」

太鼓は、器用にも太鼓部分をペコリと下げたお辞儀(?)をした。

そして、そのまま前のめりに倒れた。

「だ、大丈夫ですか？」

しょうがないので、太鼓を起こす。
すると太鼓は、心なしか照れたように、

またお辞儀をしようとしたから慌てて止めた。

太鼓を見送ってから、いよいよ扉を開けた。

別に、初めてじゃない。ここをくぐるのは。

扉が円を描くように配置されている。

そして、そこから外れたところに、もう一つだけ別の扉がある。

それが、窓付きの部屋の扉だ。

窓付きが夢の中にいるとしたら、そこが一番可能性として高い。開けてみよう。

……あれ？

開かない。カギがかかっているみたいだ。夢の中なのに……。

しょうがない。じゃあ、別の道を探してみるしかないか。また、違うものが見つかるかもしれないし。

……みんながいないと、やっぱり寂しいな。

そういえば、みんなはどうしてるんだらう？

………行ってみるか。みんながいる場所へ。

窓付きのない夢（後書き）

え…ちょっと予想以上に難しかったです。

セリフ、ほとんどないんですもの…

評価してくださった方には、本当に申し訳ありませんが、特に面白みのない小説になりそうです。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4676z/>

after

2012年1月4日11時47分発行